

## 日本英語教育史学会 会報

290

2018 年 12 月 10 日

**HiSELT** Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 江利川春雄)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562  
県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室  
tel: 0824-74-1727 fax: 0824-74-0191  
e-mail: membership@hiset.jp会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)  
ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873  
ゆうちょ銀行〇一九店【当座口座】0132873学会公式ウェブサイト [www.hiset.jp](http://www.hiset.jp)

## 第270回研究例会報告

2018 (平成 30) 年 11 月 17 日 (土), 真宗教化センター しんらん交流館 (京都市下京区) において第 270 回研究例会が開催されました。参加者は 18 名でした。

例会では 2 本の研究発表が行われました。はじめに, 広川由子氏 (愛知江南短期大学) が「*Let's Learn English* の編纂過程: Basic English 導入の試みとその行方」というタイトルでお話しされました。続いて 栞田清氏 (和洋女子大学) による「言語文化教育観の史的変遷から現代の英語教育を考える」の発表が行われました。司会は榎本剛士氏 (大阪大学) でした。以下に参加者の感想を掲載しますのでご参照ください (①は広川氏, ②は栞田氏の発表への感想です)。

◇ ◇ ◇

◆①戦後の英語テキストの編纂過程について, 様々な影響があったことを知り, 勉強になりました。(小野澤隆)

◆①自分の研究においても *Let's Learn English* は特殊な位置づけであり, その編集については興味を持っていました。自分が苦手な資料調査に基づく御発表でしたので大変参考になりました。この後に出版されるようになった教科書は学習指導要領に基づき戦前内容と似たものに戻ります。この過程で何が起きたのか研究することが重要な課題であると思いました。(insulae flumen)

◆①*Let's Learn English* の編纂過程において Ogden の Basic English 導入が検討されたことを GHQ, CI&E 側の資料によって裏付けようのご発表に大いに関心を覚えました。また, 貴重な原資料をコピーにて準備していただいたおかげで, ご発表中の解釈が資料の内容に照らして妥当であるかどうか分析できますので, 参考にしたいと思っております。ただ, 粗々なが

ら目を通した範囲では, 例えば, 資料の 29 頁の記録では, *LLE* にて使用する語彙は, Thorndike や Horn & Gates の頻度順統計を主とし, Basic English 自体はこれを *LLE* に直接取り入れるのではなく, 頻度順によって選定された語を用いることが妥当かどうかを検討する際の資料として利用するというように読めますし—30 頁, 34 頁にても同様に—, 45 頁の記録では 2ヶ所に出てくる basic English が小文字の basic であり, Basic English となっていないことで, 'the special techniques of teaching basic English' が Ogden の Basic English を教える上で特別な教授技術という意味なのか, 一般的なレベルの英語ではなく, 基本的なレベルの英語を教える際には特別な教授技術が求められるという意味なのかが分かりかねております。この辺り, これまでのご研究を始めとして広い範囲を見据えた上で分析を深めていただければと願っております。

(Dragon)

◆①2020 年度から開始される小学校の外国語科や外国語活動の *Let's Try* や *We Can* が新しい教科書と言われるなか、戦後の日本の英語教育の始まりとして *Let's Learn English* がこのように議論されたと分かりとても興味深かったです。(匿名希望)

◆①GHQ 側の一次資料を丹念にたどることによって *Let's Learn English* の成立過程を解明された学術的価値はきわめて高いと思います。日本英語教育史学会では 2001 年 10 月例会で「*Let's Learn English* 編集の思い出」と題して著者の木名瀬信也氏と中村道子氏をお招きし、その談話内容を翌年の学会紀要第 17 号に「文部省著作 *Let's Learn English* の編集とその週辺」として公表しています。今回のご発表は、その内容を大幅に塗り替えるもので、学問研究の厳しさと楽しさを堪能させていただきました。特に、当事者の記憶に基づく回想（オーラル・ヒストリー）を批判的に扱うことの重要性を痛感させられました。(みかん舟)

◆②特に近世以降、蘭学に目が行ってしまいましたが、現代の外国語教育において、中国、朝鮮からの儒学の影響をもっと再考していくことが必要であると改めて感じました。(小野澤隆)

◆②お忙しい合間を縫ってご発表いただき、ありがとうございます。長崎までフィールドワークをされ、日本書紀から幕末まで研究されるのは大変ご苦勞だと思いました。博士論文がうまくいきますよう、祈念いたします。(insulae flumen)

◆②日本英語教育史をさらにその前史に遡って言語文化教育観との視点から分析を試みられたご発表をうかがい、今回のご発表は<その 1>に当たるものであろうかと思いつつも、全体としてその幾つまでが構想されているのかと要らぬことを考えました。その中で、今回のご発表中、特に正則・変則に結びついてくる問題として外国語の音声に対するアプローチについて特にご関心が強いように思われましたので、たとえば L. G. Kelly の *25 Centuries of*

*Language Teaching*. (Newbury House, 1969) の方法論に拠られることもありかなと考えました。さらに、このような分析を進められるうえで、用語 (term) と概念 (concept) の関係についても十分に検討をお加えください。「正則」が常に韻学会話によるものとはなりませんので、正則・変則の二分法を唱えた最初が内田正雄だと結論されるためには、それ以前より外国語学習に対する姿勢に音声重視と訳読重視という別個の志向があり、それを内田が正則・変則と名付けたのか、その以前、音声重視と訳読重視とがいずれも「外つ国の言の葉を学ぶ」との umbrella term の下に概念のうえで不分明であった状況に内田が正則・変則という名称(用語)を与えたことによって意識上に別のものとされるに至ったのかというところの分析が求められようかと思えます。大きなテーマに挑まれる訳で、まずは分析の枠組みを構築されないと、論究自体が四方八方、さらには一六方、三十二方に拡がってとなりかねませんので、目標と方法とを見定めていただきたいと願っております。併せて、<その 2>を楽しみにしております。(Dragon)

◆②英語教育とりわけ言語教育の歴史をたどれば言語がない頃から日本の中での異文化との接触が近い場所でのことを中心にも考えられると分かりました。(匿名希望)

◆②言語と文化の根本を深く考えさせる、たいへんスケールの大きな発表で、ワクワク感がひとしおでした。まさに栞田先生のライフワークの一端を垣間見せて頂き、感動しました。他方で、「もしこれを博士論文にするとすれば、いったい何年かかるのだろう」という余計な心配もいたしました。学問というロマンと学位という現実をどう統一するか。これまた余計なことを申し上げました。(みかん舟)

◆②「正則」「変則」「実用」「教養」の中身は是非、詳しく知りたいと思いました。

(広川由子)

## &lt;発表を終えて&gt;

広川 由子 (愛知江南短期大学)

この度は、研究例会での発表の機会をいただき、誠にありがとうございました。

発表テーマである「*Let's Learn English* の編纂過程：Basic English とその行方」は、もともとは発表者の修士論文の一部でした。修士論文を書いてからあつという間に6年が過ぎようとしています。この間、占領軍の公式文書である CI&E 文書と日々向き合ってきました。この文書中に Basic English のことを見つけたときは、実は発表者は Basic English についてほとんど知識をもっていませんでした。それにしても、まさか、こんなに長く付き合うことになるとは想像もしませんでした。CI&E 文書に加え Ogden の著作とにらめっこする日々が続き、それでも Basic English がなかなか理解できなくて、相当遠回りをしてきました。大変苦勞しましたが、自分なりに区切りをつけたつもりです。今回はその成果を発表させていただいたのですが、論証が成功しているかどうかは全く別の話です。当日、参加の皆様からいただいた意見は貴重なものばかりで、心より感謝申し上げます。自分に何が不足しているのかがよくわかりました。これからも、外国の史料を発見し新たな日本英語教育史像を描きたいと思っています。今後ともどうぞよろしくお願い致します。



## &lt;発表を終えて&gt;

拜田 清 (和洋女子大学)

本発表では、原始・古代から近世江戸期の日本の外国語・異文化受容のあり方を言語文化教育観という視点で通時的に分析し、近現代の英語教育における「実用志向」と「母語話者志向」との関係性、およびその源泉について検討した。本発表の主張の概要は、幕末・維新时期以降の英学や英語教育の源泉が蘭学にあり、その蘭学を中心的に支えたのは儒学者や儒学の素養を身につけた人間たちであったこと、また、近世江戸期を通じて儒学者が外交を担っていたこと、さらに後の大学南校、そして東京大学に連なる蕃書調所の頭取（校長）を昌平黌の儒学者である古賀謹堂が務めたことなどから、近現代の外国語〔英語〕教育のあり方（発表者の用語では言語文化教育観）は近世江戸期の儒学者に少なからぬ影響を受けているのではないかというものであった。

近現代の外国語教育における「母語話者志向」の源泉については、古代より海に囲まれた島国の海洋民として、漁労・交易目的の人間同士の偶発的・離散的な接触における外国語・異文化受容では、ことばは母語話者から直接口移しで学ぶことが当然であったし、それ以外、文字などを介して学ぶということは考えられなかった。それゆえ、未知の言語は母語話者から直接学ぶのが自然であり当然であるという考え方が醸成されてきたと考えられる。加えて、幕末・維新时期の蘭学者（大槻玄沢など）にも大きな影響を与えていた近世江戸期の儒学者（荻生徂徠や雨森芳洲など）による原音重視（≒中国語、あるいは朝鮮語の音声重視）の学風が、近現代の外国語教育における母語話者志向や「正則」英語の成立にも関わっているのではないかというのが本発表の主旨の1つであった。

また、近世江戸期の儒学者たちは学問自体を「実用の学」（ただし、個人の利益に供するという意味ではなく、天下万民に益するという意味での実用）と捉えていたことに注目し、「実用」とい



う用語自体にさまざまな意味が込められ、また、時代とともにその内実が変化していることには注意を払いつつも、「外国語は実用のために学ぶ」という際の「実用」の文言の使用も、やはり近世江戸期の儒学者の学風、あるいは言語文化教育観にその源流を求めることが可能なのではないかというのが本発表のもうひとつの主旨であった。

## >> 事務局より

会員のみならずには、会費の納入にご協力いただきありがとうございます。未納の方へのご案内は郵便もしくは電子メールで順次お届けいたしておりますので、引き続きのご協力をお願い申し上げます。なお、ご不明の点は、お手数ですが事務局（会計担当）までお問い合わせさせていただきますようお願いいたします。

問い合わせ先 事務局（会計担当）河村和也 電子メール： <a href="mailto:membership@hiset.jp">membership@hiset.jp</a> 電話：0824-74-1727（研究室直通）
--

\*事務局よりご連絡を差し上げる際、[membership.hiselt@gmail.com](mailto:membership.hiselt@gmail.com) のアカウントを使うことがあります。あらかじめご了承ください。

## >> 英語教育史フォルダ

- ◆山田 豪（著）『英語教育・訳読の弊害』文芸社、本体 1,400 円
- ◆江利川 春雄（監修・解題）『英語教育史重要文献集成 第Ⅱ期 全 5 巻』ゆまに書房、揃本体 72,000 円（分売可）  
各巻の内容は以下の通り：
  - ①英語学習法 1（澁谷新平 [編]『英語の学び方』1918）
  - ②英語学習法 2（村井知至編『英語研究苦心談』1925）
  - ③英語教員講習 1（『スワン氏英語教授法』1902、『明治三十七年夏期金沢英語講習会筆記』1904）
  - ④英語教員講習 2（文部省・東京教育大学共催『第九回後期 教育指導者講習研究集録 英語科教育』1952）
  - ⑤英学史研究（勝俣銓吉郎「日本英学史話」1941、東京都都政史料館『東京の英学』1959）
- ◆若林 俊輔（著）、若有 保彦（編）『若林俊輔先生著作集①：雑誌連載記事』一般財団法人 語学教育研究所、定価 1,000 円（税込）

本書は、若林先生が遺した大修館の『英語教育』、研究社の『現代英語教育』、三友社の『新英語教育』という 3 つの英語教育雑誌に連載された記事のうち、『英語は「教わったように教えるな」』（2016、研究社）に掲載できなかった 86 本を収録したもの。全 8 章で構成され、各章について、若林先生から大学、大学院、語研で教えを受けた 8 名が解説を執筆している。

\*書店での販売はしていません。購入を希望される方は語研事務室までメール（Email：[office@irlt.or.jp](mailto:office@irlt.or.jp)）で氏名、郵送先、購入部数をお知らせ下さい。送料 1 部 200 円（発送手数料込み）で配送いたします。また研究所のホームページからも注文ができるよう準備中です。

## )) この先の研究例会・全国大会

- ◆ 第 271 回研究例会 2019 年 1 月 12 日 (土) 東京で開催予定
- ◆ 第 272 回研究例会 2019 年 3 月 16 日 (土) 京都で開催予定

→日程や場所は変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要 (100~200 字程度)、(4) 使用予定機器、以上の 4 点を明記の上、発表希望月の 3 ヶ月前の 10 日 (7 月発表希望であれば 4 月 10 日) までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiset.jp

## 日本英語教育史学会 第 271 回 研究例会

日 時 : 2019 年 1 月 12 日 (土) 14:00~17:00

場 所 : 順天堂大学 お茶の水キャンパス第 2 教育棟 303 教室 (東京都文京区本郷 2-4-4)

研究発表

### 「Harold E. Palmer はリーディング力育成に関して何を残したか」

久保野 りえ (筑波大学附属中学校講師)

#### 【概要】

Harold E. Palmer は音声を重視した英語教授法を主張したが、リーディングについてはどのように考えていたのであろうか。英語教授研究所の Bulletin に Palmer が書いた記事等からリーディングについての記述を収集すると、現在にも活きる提言が早い時期からされていた。在日当時の雑誌では強い批判も見られ、リーディングにつながる音声の授業が理解されなかったことがわかる。Palmer のリーディング面での功績を明らかにしたい。

自著を語る

### 「政策史から現政策を斬る：江利川春雄著『日本の外国語教育政策史』を素材に」

提案者：江利川 春雄 (和歌山大学教授)

指定討論者：拝田 清 (和洋女子大学教授)

#### 【概要】

官邸主導による「グローバル人材育成」を学校教育に求める異常な外国語教育政策。英語教育界に身を置く者として、沈黙は許されない。まずは即座の反論、幅広い呼びかけ、代案の提起。より根本的には、外国語教育政策を歴史的にたどり直し、現状の問題点を学問的に焙り出すこと。古代にまで溯り、現実の政策批判に追われ、刊行に 7 年を費やした。政策史年表と資料集も附したので、多角的・批判的な検討の上に、あるべき外国語教育政策を共に考えていきたい。

参加費：無料

問合せ：日本英語教育史学会例会担当 ([reikai@hiset.jp](mailto:reikai@hiset.jp))

◆例会終了後に懇親会を行います。こちらにも奮ってご参加ください。

★会員外の方の研究例会へのご参加を大いに歓迎いたします。

【会場案内】 (順天堂大学ウェブサイトの「交通アクセス」 (<http://www.juntendo.ac.jp/access/>)  
にある「本郷・お茶の水キャンパス マップ」より)



【交通案内】 ・JR 線「御茶ノ水」駅 (御茶ノ水口) より徒歩 7 分  
 ・東京メトロ (丸ノ内線) 「御茶ノ水」駅 (出入口 1 または 2) より徒歩 7 分  
 ・東京メトロ (千代田線) 「新御茶ノ水」駅 (B1 出口) より徒歩 9 分

**EDITOR'S BOX** 4 ページの「英語教育史フォルダ」でも紹介させていただきましたが、『若林俊輔先生著作集①：雑誌連載記事』が先月 9 日に一般財団法人語学教育研究所から出版されました。こちらの著作集には、研究社の『現代英語教育』に掲載された「指導技術ヒント」「いっとうりょうだん」「ハラタチのとげ」、大修館の『英語教育』に掲載された「遠めがね」「楽しい授業ということ」「教科書にはいろいろ問題がある」といわれるが、教科書問題を考えるときはまず知っておいていただきたい話」「提案・英語のカリキュラム」、三友社の『新英語教育』に掲載された「知的好奇心の対象としてのことば」の計 8 つの連載のうち、一昨年に研究社から出版された『英語は「教わったように教えるな』(若林俊輔 (著), 小菅和也・小菅敦子・手島良・河村和也・若有保彦 (編)) に掲載できなかった記事を収録しています。／この著作集の編集作業を通じて、出版社の方々の苦労の一端を味わうことができたことは、個人的にはとても貴重な体験でした。／話は変わりますが、今年は、日本各地で大雨や猛暑、地震による被害が続いた一年でした。来年は、こういった災害が少しでも減ることを心から願っています。みなさま、どうかよいお年をお迎え下さい。(若)

© 日本英語教育史学会会報編集部 (秋田大学 若有研究室 [geppo@hiset.jp](mailto:geppo@hiset.jp))